

サイエンス漢方処方研究会



「今回もレベルの高い演題が集まりました」と井齋院長

静仁会静内病院(北海道)の井齋偉矢院長が理事長を務めるサイエンス漢方処方研究会はこのほど、今回で5回目となる定例のシンポジウムとして、都内で「The Best Case Study シンポジウム2」を開催した。14演題に加え教育講演も行うなどプログラムは充実。集まった多くの参加者は発表に真剣に耳を傾け、さまざまな疾患に対する漢方薬の使用症例を学んだ。

漢方薬の効果を科学的にとらえながら臨床現場に取り入れ、医療の質を向上させていくのがサイエンス漢方処方。井齋院長が提唱している概念だ。これを実践するための情報共有や新たな知見の獲得、切磋琢磨の場として設立されたのが同研究会。2016年4月末現在、会員は医師、歯科医師、薬剤師、獣医師など313人に上る。

井齋院長は「昨年以上の応募があり、今回もレベルの高い演題が集まりました。多彩で活発なディスカッションが展開されると確信しています」と開会挨拶。

前回に引き続き演題を公募して症例発表会形式で実施。漢方薬は幅広い疾患・症状に対して効果があることから演題の内容は多岐にわたり、発表した医師も形成外科や麻酔科、内科、神経小児科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、循環器内科などバラエティ豊か。演題からキーワードを拾っても、高齢者の足部熱傷、内視鏡検査、外傷性頸部症候群、乳がん術後の筋肉痛・関節痛、術前不安、小児てんかん、嘔声、糖尿病患者の慢性歯周病など多様だ。

徳洲会からの演題も1つあり、東京西徳洲会病院循環器内科の川原隆道医師が「慢性腎臓病を合併した慢性心不全の治療に五苓散が有効であった一例」と題し発表した。心不全があり腎機能の低下した患者さんに対し、利尿薬を投与したものの効果が不十分だったことから、体内の水分調節に効果がある五苓散を追加投与。その結果、心不全症状や肺うっ血が改善、胸水が減少、腎機能の悪化もなかった。川原医師は「さらに多くの症例の検討を通じて、腎機能低下をとまなう慢性心不全患者さんに対する五苓散の臨床的役割が明らかにされることが望まれます」と結んだ。

教育講演は東京理科大学薬学部の堀江一郎助教による「十全大補湯による腫瘍免疫活性化機序」。十全大補湯はマクロファージやT細胞を活性化し、補中益気湯はNK細胞を活性化することにより、腫瘍転移抑制作用が認められている。



五苓散が有効だった慢性心不全症例を発表する東京西徳洲会病院の川原医師

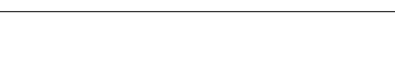
しかし、その作用機序の詳細は不明な点が多い。そこで堀江助教は、がん免疫療法の新たな標的として注目されている骨髄由来免疫抑制細胞(MDSC=腫瘍免疫を阻害する悪性化因子)に対する十全大補湯と補中益気湯の作用に関する研究成果などを発表した。

なお6月3日から3日間にわたり香川県高松市で開かれる第67回日本東洋医学学会学術総会では、「漢方薬をサイエンスする」というテーマのワークショップが予定されており、井齋院長もサイエンス漢方処方について発表を行うほか、同研究会のメンバーも発表する予定。また今夏には会員向けのシンポジウムも計画している。

松原徳洲会病院(大阪府)は3職種合同の研修修了式を挙げる。2年間にわたるローテーション研修を無事終えた医師2人、歯科医師1人、看護師12人に対し指導者らが、それぞれ思い出を振り返りつつ祝辞を贈った。

同院は伝統的に医師、歯科医師の研修終了後に関係者一同で祝杯を上げてきたが、看護師もローテーション研修するようになったため、昨年から3職種合同で実施。なかには同院を離れる修了者もいるが、「つらいこ

い、収穫物は栄養科と相談のうえ、レクリエーションや調理練習などに使用。身体を動かさせない患者さんからも、水やりの頻度や「マリーゴールドを植えると虫が来ない」などのアドバイスの声が上がり、認知面への働きかけにもなっている。森PTは回復期リハビリについて、「目に見えて良くなるのがわかるので、とてもやりがいがあります。訪問リハビリや通所リハビリのスタッフらと情報共有し、その人の状態、状況に応じたリハビリメニューを考案することが楽しみです」。今後は、「ケアマネジャーとの情報共有に力を注いでいきたい」と意欲を示す。



研修修了者を囲み和やかに歓談

新庄徳洲会病院

医療圏唯一の回復期病棟

他院からの紹介が半数以上



「その人が実際に生活できるかを考えてリハビリを提供しています」と早坂副主任(左)と森PT

新庄病院は11年7月に回復期リハビリ病棟を開始、これまで延べ482人(3月末時点)の患者さんの治療にあたり、現在理学療法士(PT)と作業療法士(OT)各2人、看護師13人、介護士6人が専従し、非常勤や他病棟兼務のスタッフ

「以前利用した方のクチコミもあり、ようやく地域の方にリハビリ病棟の存在を知っていただけようになっています」と、早坂ひとみリハビリ科副主任は笑顔。



ベッドから立ち上がるなど生活基本動作をしっかりと訓練

主な疾患は脳血管障害で、患者さんの平均年齢は約80歳。最上医療圏の高齢化率は30・8%(山形県健康福祉部健康長寿推進課「平成26年データで見ると山形県の高齢者を取り巻く状況」と、全国平均(25・1%、内閣府「平成26年版高齢社会

を心配するサポート)前からは患者さんや家族に家族構成や生活環境を聞き取り、生活面でのどのような介助が必要か調査。たとえば玄関までの段差や屋内の階段の有無、浴槽の深さ、寝所からトイレまでの距離などを聞き出し、退院後の生活を見据えたりリハビリを行う。

また、同院の患者さんには農家の方が多いことから、患者さんのモチベーション向上を目的に同院敷地の一角に畑を設けトマトなど栽培、畑作業の一部をリハビリに取り入れている。

看護師の付き添いの下、水まきや雑草取りなど無理のない範囲で一緒に行

い、収穫物は栄養科と相談のうえ、レクリエーションや調理練習などに使用。身体を動かさせない患者さんからも、水やりの頻度や「マリーゴールドを植えると虫が来ない」などのアドバイスの声が上がり、認知面への働きかけにもなっている。

森PTは回復期リハビリについて、「目に見えて良くなるのがわかるので、とてもやりがいがあります。訪問リハビリや通所リハビリのスタッフらと情報共有し、その人の状態、状況に応じたリハビリメニューを考案することが楽しみです」。

同病棟は最上郡(1市4町3村)で唯一の回復期リハビリ病棟であり、その守備範囲は1804km<sup>2</sup>と、香川県(1876km<sup>2</sup>)全域の面積に近い。そのうえ山形県全体でも回復期リハビリ病棟を保有する医療機関数は21施設と少なく(山形県14年度病床機能報告)、時に医療圏を越えて患者さんが紹介されてくることもある。

「以前利用した方のクチコミもあり、ようやく地域の方にリハビリ病棟の存在を知っていただけようになっています」と、早坂ひとみリハビリ科副主任は笑顔。

主な疾患は脳血管障害で、患者さんの平均年齢は約80歳。最上医療圏の高齢化率は30・8%(山形県健康福祉部健康長寿推進課「平成26年データで見ると山形県の高齢者を取り巻く状況」と、全国平均(25・1%、内閣府「平成26年版高齢社会

を心配するサポート)前からは患者さんや家族に家族構成や生活環境を聞き取り、生活面でのどのような介助が必要か調査。たとえば玄関までの段差や屋内の階段の有無、浴槽の深さ、寝所からトイレまでの距離などを聞き出し、退院後の生活を見据えたりリハビリを行う。

また、同院の患者さんには農家の方が多いことから、患者さんのモチベーション向上を目的に同院敷地の一角に畑を設けトマトなど栽培、畑作業の一部をリハビリに取り入れている。

看護師の付き添いの下、水まきや雑草取りなど無理のない範囲で一緒に行

い、収穫物は栄養科と相談のうえ、レクリエーションや調理練習などに使用。身体を動かさせない患者さんからも、水やりの頻度や「マリーゴールドを植えると虫が来ない」などのアドバイスの声が上がり、認知面への働きかけにもなっている。

森PTは回復期リハビリについて、「目に見えて良くなるのがわかるので、とてもやりがいがあります。訪問リハビリや通所リハビリのスタッフらと情報共有し、その人の状態、状況に応じたリハビリメニューを考案することが楽しみです」。

地域特性を生かしたりハビリ

新庄徳洲会病院(山形県)は、二次医療圏である最上医療圏内唯一の回復期リハビリテーション病棟をもち、患者さんの在宅復帰を支援している。同医療圏の面積は香川県全域の面積に近く、患者さんは広域から来院。他院からの紹介率は62・5%(2014年度)と地域に欠かれない存在だ。同院は地域の医療機関やケアマネジャーと密接に連携を図り、急性期から在宅療養までシームレスなケア環境を整備。ケアマネジャーを対象とした勉強会を定期開催して情報共有したり、地域特性を生かしたりハビリを実施したりし、在宅復帰率の向上を目指している。

ハビリ病棟の存在を知っていただけようになっています」と、早坂ひとみリハビリ科副主任は笑顔。

主な疾患は脳血管障害で、患者さんの平均年齢は約80歳。最上医療圏の高齢化率は30・8%(山形県健康福祉部健康長寿推進課「平成26年データで見ると山形県の高齢者を取り巻く状況」と、全国平均(25・1%、内閣府「平成26年版高齢社会

を心配するサポート)前からは患者さんや家族に家族構成や生活環境を聞き取り、生活面でのどのような介助が必要か調査。たとえば玄関までの段差や屋内の階段の有無、浴槽の深さ、寝所からトイレまでの距離などを聞き出し、退院後の生活を見据えたりリハビリを行う。

また、同院の患者さんには農家の方が多いことから、患者さんのモチベーション向上を目的に同院敷地の一角に畑を設けトマトなど栽培、畑作業の一部をリハビリに取り入れている。

看護師の付き添いの下、水まきや雑草取りなど無理のない範囲で一緒に行

い、収穫物は栄養科と相談のうえ、レクリエーションや調理練習などに使用。身体を動かさせない患者さんからも、水やりの頻度や「マリーゴールドを植えると虫が来ない」などのアドバイスの声が上がり、認知面への働きかけにもなっている。

3職種合同・研修修了式 医師・歯科医師・看護師

松原徳洲会病院(大阪府)は3職種合同の研修修了式を挙げる。2年間にわたるローテーション研修を無事終えた医師2人、歯科医師1人、看護師12人に対し指導者らが、それぞれ思い出を振り返りつつ祝辞を贈った。

同院は伝統的に医師、歯科医師の研修終了後に関係者一同で祝杯を上げてきたが、看護師もローテーション研修するようになったため、昨年から3職種合同で実施。なかには同院を離れる修了者もいるが、「つらいこ

井齋・静仁会静内病院院長が理事長

静仁会静内病院(北海道)の井齋偉矢院長が理事長を務めるサイエンス漢方処方研究会はこのほど、今回で5回目となる定例のシンポジウムとして、都内で「The Best Case Study シンポジウム2」を開催した。14演題に加え教育講演も行うなどプログラムは充実。集まった多くの参加者は発表に真剣に耳を傾け、さまざまな疾患に対する漢方薬の使用症例を学んだ。